薬用作物（ドクダミ）の産地化に向けた取り組み支援

■　まんのう町地域振興研究会　■

中讃農業改良普及センター　（○黒川幸重　荒脇孝志）

●対象の概要

まんのう町地域振興研究会は、まんのう町内の生産者等を会員とし、地域振興に結びつく特産品の研究・開発を目的として平成23年に設立され、これまでヒマワリ、ジネンジョ、マコモタケなど地域の立地条件を活かした特産物の導入と地域の活性化に取り組んできた。平成28年からは新たに薬用作物（ドクダミ、アシタバ、ウラジロガシ）を隣県にある生薬業者と契約栽培することとなり、新しい取り組みが始まりつつあった。

●課題を取り上げた理由

薬用作物はこれまで山野に自生する薬草を採取し出荷していたため栽培した経験がなく、栽培技術が確立されていない。また、県内ではドクダミの栽培に取り組んでいる産地はなく、産地化を図るためには安定的に栽培する技術の確立が喫緊の課題であった。また、契約栽培であるため販売価格は安定しているものの、高齢者が多い中で、省力的な栽培法を確立し、かつどの程度の収益があるのか検討する必要があった。更には、地元の産直施設等で独自の販売を行うなど、契約販売以外の所得向上対策についても検討する必要があった。

●普及活動の経過

1　情報提供と実証ほの設置

平成28年5月に、同研究会の総会においてドクダミの生育特性や他県での栽培事例などを説明し、栽培に取り組む生産者の不安を解消するとともに、産地化に向けた機運の醸成を図った。また、まんのう町帆山地区で前年度から栽培に取り組んでいる同研究会員のほ地にドクダミの実証ほを設置し、定植から、除草、収穫までの作業の省力化、安定生産技術、収益性について調査を実施した。ドクダミは栽培用品種がないため周辺に自生するドクダミの苗を利用するほか、低価格の有機質肥料を利用しコストの削減を図るとともに、

地元の協力を得て実証ほを設置

雑草抑制のためのマルチを全面被覆し、管理の省力化に努めた。マルチの上からの直差しで順調に生育し、7月の多雨で１週間程度の滞水があっても生育に影響はなく、排水不良の水田でも栽培可能であることが確認された。ただし、直差しした苗の伸長はほとんど見られず、分枝の発生と地下茎の伸長が12月まで続き、１株から約8本の地下茎が確認された。

2　労働時間及び収益性の調査

ほ場準備から収穫まで１年間を通じて作業日誌を記帳してもらい、作業別の労働時間を調査した。また、資材費、収量及び出荷額について聞き取り、収益性等について検討した。

また、栽培開始から１年が経過した平成29年7月、先進地である兵庫県上郡町のドクダミ栽培について会員による視察研修を実施し、改善すべき管理方法や販路開拓等について検討した。

3　ドクダミを利用した商品開発の検討

契約栽培で販路は確保しているものの、更なる所得向上を目指し、付加価値の高い商品を開発し独自販売することを役員会で検討した。

その結果、平成29年度に廃校のリノベーションにより整備されるまんのう町ものづくりセンターを中心にドクダミ等の薬用作物の乾燥、加工、パッキングを実施し、新たな商品開発に取り組む

こととなった。具体的にはドクダミ、スギナとまんのう町特産の緑茶をブレンドした健康茶などを商品化することとされている。

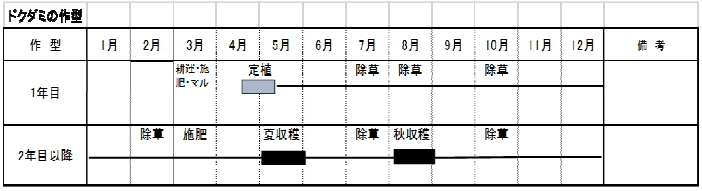
●普及活動の成果

１　経営指標及び栽培技術の確立

平成28年度に設置した実証ほにおいて栽培方法、作業の省力化、収益性、品質等について調査した結果、経済作物として導入可能なことが確認されたことから、平成29年度版ドクダミ栽培しおり（図−１）を作成するとともに、目標とする経営指標を設定（表−１）し、平成29年5月の総会で会員に栽培のポイントや作業管理の概要、収益性について周知した。

表　ドクダミの経営指標

目標収量（乾物重）	４００kg/10a
年間労働時間	１９０時間/10a
年間目標売上額	３０万円/10a
推定労働報酬	１，１３５円/hr・人



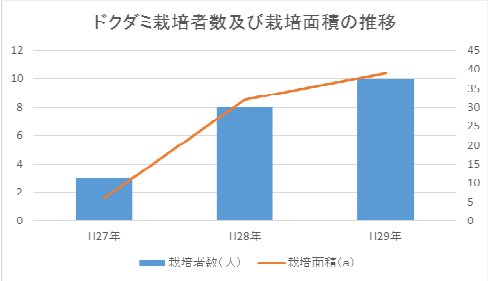
図−１　平成29年度版ドクダミ栽培しおり（一部）

平成29年度においても同地区で実証ほを設置し、３年目での収量調査、施肥方法、栽植密度の違いによる生育量の比較試験を実施した。その結果、５月収穫では3年目ほ場で560kg/10a（乾物重）の収量が確認され、栽植密度の比較では30cm×30cm（11株/1㎡）で安定した収量が確保された。一方で、収穫後に畑雑草が繁茂し、２番収穫（９月）を断念する結果となり、夏の雑草対策が課題として残った。

平成29年度実証ほ（3年目のほ場H29.5.31）

２　新たな地域特産物として定着

平成27年に３名・6aでドクダミの栽培が始まり、翌年には同研究会内に薬草部会が設置されたのを契機に8名・32aと拡大し、平成29年度には10名・38aの栽培面積となった。（図−2）



図−２　生産者数及び栽培面積の推移

また、地域再生を協議する「まんのう町ものづくり推進協議会」において、ひまわりと併せて薬草（ドクダミ）を推進作物として位置づけ、官民協働で商品開発、販路開拓等の６次産業化を図ることとなった。

●今後の普及活動の課題

１　雑草対策及び早期活着技術の検討

ドクダミに適用される農薬が少ない中、夏収穫から秋収穫の間に繁茂する畑雑草については、農薬を使用せずに抑制する技術が必要であり、滞水に強い特徴を活かした耕種的防除を検討する必要がある。また、定植年の早期生育促進が期待されるプラグ苗の活用についても検討を要する。

野菜のｾﾙﾄﾚを利用したﾌﾟﾗｸﾞ苗（H29.11.7）

２　収穫作業の省力化の検討

年間の全労働時間（190hr/10a）の79%を占める収穫・調製作業（５～６月）を省力化することで、現在の１戸平均規模（２～７a）の拡大が期待される。そのため、農研機構西日本農業研究センター（善通寺市）が開発したドクダミ用収穫機（試作段階）の現地適応性について検討する必要がある。